

福島・山形の旅 2025



2025 年 6 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

6 月はサクランボの季節、私は友人がやっている山形のサクランボ農園の収穫手伝いに行ってきた。その前日には福島の会津磐梯山周辺も観光したので合わせて紹介したい。

第一章 福島

■旅が始まる

今回の旅は山形でサクランボ農園を営んでいる友人を手伝うために計画された。その友人はシロちゃん、私とは 2018 年の 56 日間オセアニアクルーズで知り合った。

そして同じクルーズ船に乗っていた九州に住む女性 2 人も参加することになった。彼女たちは自称“美魔女軍団”のタヅさんとコマちゃん、2 人とも酒がめっぽう強い。

ここ数年、私も含めた 4 人で九州一周バス旅や足摺岬・日御碕四国中国横断旅にも行っている旧知の間柄でもある。(旅行記「九州バス旅 2023」、「中国四国の旅 2024」参照)

彼女たちがせっかく九州から来るので、山形だけでなく福島も見て回ろうということになった。

■玉子湯

6 月中旬、私と美魔女軍団は福島県の郡山駅前に降り立つ。そしてレンタカーを借りて福島の高湯温泉にある旅館「玉子湯」に立ち寄り湯をする。

私は高湯温泉には十数回訪れており、玉子湯にも何度か泊まっている。それは冬の猪苗代湖で例年行っている“極寒キャンプ”の翌日に訪れることが多いからだ。

そんな私でも疑問に思っていたことがある。それは「玉子湯」という宿の名前で、私はいわゆる“卵が腐ったような匂い”と言う言葉からきているのだと思っていたが、今回フロントで聞くと“温泉に入ると肌が玉子のように滑らかになる”からだと教えてもらう。

確かに卵が腐った意味ならば“卵”の漢字を用いて卵湯にするが、ここは“玉子”を用いてい

るから調理をした玉子を意味している。それに“腐った”という表現は温泉宿としてはいただけないからだろう。

それでも宿周辺にはその匂いが立ち込めている。実は私はこの匂いが好きなので、好んでこのような匂いの温泉を訪れている。

温泉に浸かる。九州の2人は高湯温泉も玉子湯も知らなかったが、東北を代表する名湯に1回浸かっただけで虜になっている。



【玉子湯の温泉小屋と源泉湧出口 露天風呂は温泉小屋の向こうにある】

それにしてもこの湯に浸かっていると、何故か“まったり”として癒される。そのまったり感はどうしてだろうか。

温泉成分表には湧出温度は44℃、pHは2.8、自然湧出で毎分3000リットル以上と書かれている。それは源泉かけ流しの鮮度抜群の温泉と言っていいだろう。

実は、温泉は鮮度がとても重要だ。そして私の温泉ソムリエの血が騒ぎだす。

温泉は地中にある時は空気（酸素）に触れていないので酸素が足りない状態で存在する。つまり酸化の反対の還元側にあり、最も鮮度が高い状態にある。それが地上に出ると空気に触れて酸化して鮮度が落ちていく。その理由は加温、加水、循環、あるいは源泉からの距離が長いことでたくさんの空気に触れるからだ。

その一方で人間の体の老化現象も、ある意味では酸化によるものだ。

しかしこれが還元系の温泉、つまり鮮度の高い温泉に浸かると酸化が抑制される。つまりアンチエイジング効果、もう少し言うと“若返り”も期待できる。

玉子湯は湯量豊富で、源泉湧出口の近くに露天風呂や温泉小屋がある。さらに44℃なので加温も加水もしていない。湯量豊富だから循環もしていない“かけ流し”だから鮮度が良い。

つまりアンチエイジング効果があり、それがまったり感の理由だろう。美魔女軍団が虜になるのも納得する。

■五色沼

高湯温泉から磐梯吾妻スカイラインを抜けて裏磐梯高原にやって来る。

裏磐梯高原は 1888 年（明治 21 年）に発生した会津磐梯山の大噴火によって山体が崩壊して川が堰き止められてできた。標高約 800m の高原は主に別荘地になっており、多くの湖がある。中でも 30 余りの色の異なる沼の集まり「五色沼」は有名だ。

そんなことを美魔女軍団に話すと、「裏磐梯の由来は分かったけど、なぜ“裏”なの？」と意表をつく質問が飛んできた。さらに「北磐梯でいいんじゃないの」と言っている。確かに会津磐梯山の北だから場所的に言えば北磐梯でいいはずだ。

会津磐梯山の南側には猪苗代湖と会津盆地がある。会津盆地には会津若松城があり、会津藩の殿様が住んでいたから城のある方が表になる。従って会津磐梯山の向こう側を無意識のうちに裏としたのだろう。

それにしてもネーミングのセンスが悪い。最近では聞かなくなったが、表日本と裏日本という表現のようで、裏と言われた方は気分が悪い。

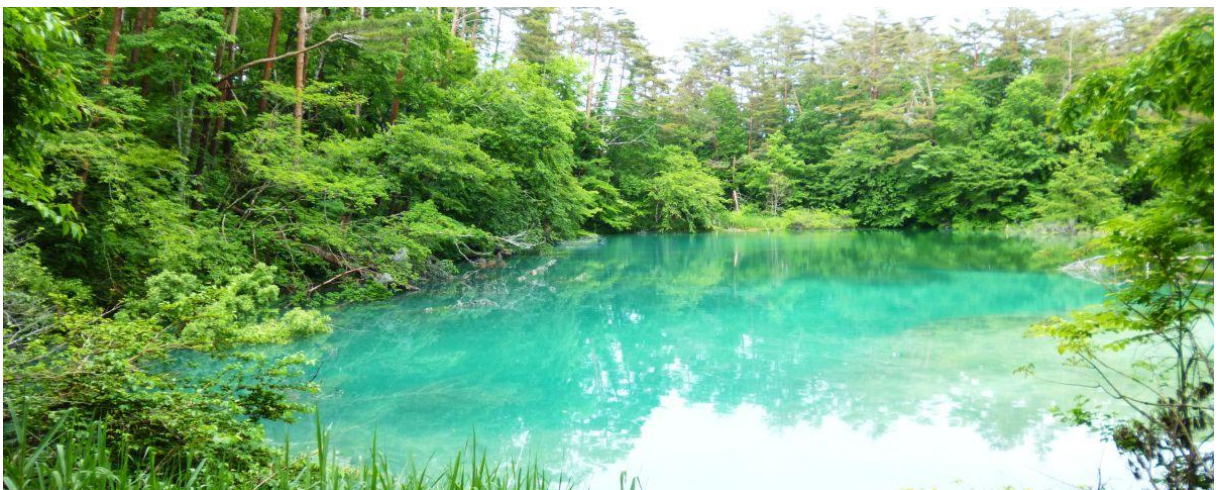
そういえば九州の 2 人は福岡なので、日本海側つまり裏日本と呼ばれている場所だ。

さらにもう一つ質問がきた。「会津は初めて来たけど、『♪会津磐梯山は宝の山よ♪』という民謡だけはよく知っているよ。でも宝の山の“宝”とは何？」と聞いてくる。

その歌詞の続きは『♪笹に黄金が、えーまたなりさがる♪』だから、宝とは金あるいは米かもしれないが確証もない。私は「そういうことは地元の人に聞くから旅に来た意義があるのさ」とか言って、お茶を濁した。

五色沼の遊歩道を散歩する。九州の 2 人はここも初めてなので、その色に感激して写真を撮りまくっている。ただ残念ながら本日は曇り空なので、観光パンフレットにあるような見事な五色にはなっていない。

それでもますますの色で撮れているのは、宝の山の恩恵だろう。



【五色沼の青沼】

■あまの食堂

JR 猪苗代駅前の「あまの食堂」にやって来る。入口には本日休業の張り紙が貼られている。

しかし私は本日行くことは事前に連絡してあるから、おそらく他のお客が入って来ないようにしているのだろう。

案の定、店に入ると店主の天野さんが迎えてくれる。私は半年前にもソースかつ井の旅でこの店に立ち寄っているが、その時に比べて彼は痩せたように見える。

私がこの店を知っているのは、私とキャンプ仲間たちは毎年のように真冬の猪苗代湖に極寒キャンプに来ている。その際にここで食事をするので店主とも仲良くなって、「植木さん」、「天野さん」と呼び合う間柄になっている。

そして今回、私は彼に「九州から友人が来るから、日曜日の夕方に伺いますね」と電話でお願いした。ところが彼は「先日、手術をしまして、営業は体調次第なので当日連絡します」と言っていた。そして今朝、「夕方に来て下さい」と連絡をもらった。

テーブルに着いて、会津名物のソースかつ井を注文する。

いつもは天野さんが調理をしていたが、今日は娘さんが調理している。そして彼は驚くべきことを話し始める。

「植木さん、今日が最後のソースかつ井になるかもしれません。それで娘にレシピを教えてあるので、今日は娘が作ります。植木さんにはその味を確認して欲しいのです」と言っている。

私は「どうしてですか？お元気そうですが」と聞くと、彼は「実は医者から癌の宣告をされて、手術はしたけれどもうだめみたいです。そのことは自分が一番分かっています」と弱気な発言をしている。

私は「娘さんが、継いでくれるのでしょうか。天野さんはご意見番でいればいいじゃないですか」と言うと、彼は「娘は他に仕事があって継ぐかどうか・・・、だから本日が最後かもしれません」と寂しそうに言っている。

私も美魔女軍団も、絶句してしまう。

それでも私は「大丈夫ですよ、それよりも今度ソースかつ井の本を出そうと思っています。この食堂のことも、天野さんのことも載せていいですか？」と聞くと、彼は「生きていれば・・・」と寂しそうに答える。

■宝の山の正体

暗い話になりそうだったから、私はあの質問をぶつけてみた。

「会津磐梯山は宝の山と言う民謡がありますが、その宝とは何ですか？」と聞く。天野さんは「たぶん水でしょうね。綺麗な水があるから美味しい酒ができて、水がたくさんあるから田んぼもたくさんあり、美味しい米もできます」と教えてくれる。さすがに地元の人は違う。

そういえば、この食堂のメニューに“七重郎もつきり”というものがある。七重郎は地元の酒で、“もつきり”とは、升の中にグラスを置き、溢れるくらいなみなみと日本酒を注ぐことだと天野さんから聞いたことがある。

その七重郎の蔵元は猪苗代町にあって、1848 年創業なので会津磐梯山の噴火よりも古い。宝の山の“表”は噴火の前からその恩恵を受けていた。

そして宝の山は噴火によってそれまで日の目を見ない“裏”にも恩恵を与え、多くの湖や五色沼などの観光名所を創った。やはり会津磐梯山は大昔から今に至るまで宝の山なのだろう。

■ソースかつ井

自称ソースかつ井評論家の私は会津をソースかつ井の 4 大聖地の一つとしている。もちろん猪苗代町も広い意味では会津地方なので、あまの食堂もその流れをくんでいる。

そのソースかつ井が出てくる。井にご飯、その上に千切りキャベツを敷いて、存在感たっぷりに揚げたての厚いカツがたくさん載っている。カツが厚く多いので、いつものように井の蓋はかぶせることが出来ずに、横に立っている。

量だけではなく、味もいつもと変わらず美味い。カツは豚のロース肉をカラッと揚げて、衣のサクサク感が残っているうちに特製ソースにくぐらせている。

美魔女軍団は初めてソースかつ井を食べるとのことで、「想像していた味よりもずっとすっきりとしているよ」と言っており、その美味しさを堪能している。

いつもどおりボリュームたっぷりなので、私はなんとか完食する。女性にはきついだろうと思っていると彼女たちも完食する。天野さんと私の会話を隣で聞いていたから本日のソースかつ井の意味を理解したのだろう。

店から出た彼女たちは「ひょっとしたら最後になる日に、ご馳走になれてよかったわ」と言いながら、目頭を押さえていた。



【あまの食堂のソースかつ井】

■かくだい食堂

彼女たちにあまの食堂と私の関係を理解してもらうには、やはり「かくだい食堂」のことを話さないといけない。私は次のよう話し始める。

私とキャンプ仲間たちは 1990 年代後半から真冬の猪苗代湖畔にキャンプに来ていた。当時は猪苗代駅前に「かくだい食堂」というソースかつ井の人気店があって、私たちは毎年立ち寄っていた。その頃のかくだい食堂は先代の老夫婦が営んでいて、実は奥さんは会津若松から嫁いできた人で、実家はソースかつ井の名店「白孔雀」だった。従ってかくだい食堂のソースかつ井は 4 大聖地の会津のものと同じになっている。

それが息子の代になり、カツのサイズが年々巨大化していった。蓋が閉まらなくなり立つようになった。これがインスタ映えで見事に当たって人気も急上昇し、店はさらに繁盛した。そうすると収入が増えて、派手な生活が始まる。息子は女遊びと酒びたりの生活が過ぎて、とうとう体を壊してしまった。

その結果、店を閉めざる得なくなり、全てを隣のあまの食堂に引き継いだ。味はもちろんお客も道具も看板も引き継いだ。それ以来私たちは、毎年あまの食堂に来ている。

この話を美魔女軍団は興味深く聞いていて、そして「会津磐梯山の歌詞の続きは『♪笹に黄金が、えーまたなりさがる。おはら庄助さん、何で身上（しんしょう）つぶした朝寝、朝酒、朝湯が大好きで、それで身上つぶした。ハァ、モットモダ、モットモダ♪』だったわよね。身上をつぶすのもこの土地の伝統かしら」と言っていたのがとても印象的だった。

■猪苗代湖

せっかく猪苗代町に来たので地元が生んだ英雄の野口英世の生家が展示してある野口英世記念館に立ち寄る。美魔女軍団は「こんな生家が残っているのね」と驚いている。

極寒キャンプをする天神浜も見物する。猪苗代湖の背後には会津磐梯山がそびえている。私にとって雪のないキャンプ場に来るのは久しぶりなので新鮮な気持ちになる。九州には大きな湖がないから、2人は日本第三位の大きさの猪苗代湖に圧倒されている。



【野口英世の生家】



【天神浜キャンプ場】

郡山に戻り、「ドーミーイン EXPRESS 郡山」にチェックインする。

このホテルは私のお気に入り、そのサービスがビジネスホテルを超えて高級ホテル並みなので最近よく利用している。詳しくは旅行記「秋田の旅 2025」を見て欲しい。

夜の 10 時頃には夜食のラーメンの無料サービスがある。地元の白河ラーメンのような味で実に美味しい。この時間帯のラーメンは酒飲みの胃袋と心を驚掴みする。

第二章 山形

■サクランボの収穫

翌日、郡山から山形新幹線で「さくらんぼ東根駅」にやって来る。駅名にまでサクランボが付いていることに美魔女軍団は驚いている。そして駅にはシロちゃんが迎えに来てくれている。

彼にサクランボの収穫状況を聞くと、温暖化の影響らしく年々収穫量が減っているという。そのため今回は手伝うほどの量がないとも言っている。しかしそれは遠方から来て農作業をしてもらっては申し訳ないという彼の心遣いだろう。

そんな訳で収穫作業はせずに、彼のサクランボ農園を見学することになる。

サクランボはビニールハウスで栽培している。しかしビニールハウスと言っても屋根だけで、屋根以外の側面はネット（網）になっている。その理由をシロちゃんに聞くと「鳥がサクランボを食べにくっから、鳥よけだー」と山形弁で答えてくれる。



【農園のサクランボ】

シロちゃんは「好きなサクランボ取って食べてケロ」と山形弁で言っている。私たちは「申し訳ないなあ」と言いながら、1個、2個を採って食べ始める。さすがに本場で採りたてなので美味しい。そんなことで次から次へ手が出て止まらない。

これではサクランボの収穫でなく、サクランボ狩りになっている。

■ひなの宿

宿は「雛とべに花の里 ひなの宿」に泊まる。ここは3年前にも別の友人とサクランボの収穫手伝いに来た時にも泊まった。町営なので安心感があって田舎特有ののんびり感もある。

宿は立ち寄り温泉に併設されており、立ち寄り湯の入浴料は350円と都会ではとても信じられない料金に美魔女軍団は驚いている。

宿の夕食は食べきれないほどのご馳走が出てくる。田舎では“食べきれない”というのがもてなしの基本になっているようだ。

前菜、そしてメインの鰻の蒲焼き、マグロやサーモンの刺身、カニグラタン、野菜の天ぷら、茶わん蒸しや小鉢もあり、とても1人分とは思えないほどの種類と量が並ぶ。

連泊したが、メニューが変わり、鰻の蒲焼きが山形牛のステーキになった。

■山形観光

翌日は、シロちゃんが私たちを山形観光に連れて行ってくれるという。

いくら収穫量が少ないとはいっても、この時期は忙しいのに申し訳ないと言いつつもお願いしてしまうのは、旅友の図々しさと、その絆の証（あかし）だろう。

大正ロマン溢れる「銀山温泉」にやって来る。

その名前が示すように昔は銀の鉱山で、銀鉱山は室町時代に開かれた。昔の日本は銀本位制だったので銀の需要は多く、銀鉱山は繁栄していた。そして江戸時代初期に鉱夫が温泉を発見した。その後、銀鉱山は閉山になったが、温泉は湯治場として賑わった。

ところが大正時代になって直ぐの大洪水によって温泉街は壊滅した。それでも温泉は出るから、大正時代の終わり頃から再び旅館が建てられはじめて正真正銘の大正ロマンの温泉街になっていた。

そして NHK の朝ドラ「おしん」で全国的に知れ渡り、さらにアメリカ人女性が女将を務める“青い目の女将の旅館”も登場して話題になり、現在の地位を築いた。

もちろん九州の2人は初めてで、大正ロマン溢れる街並みにとても感動している。



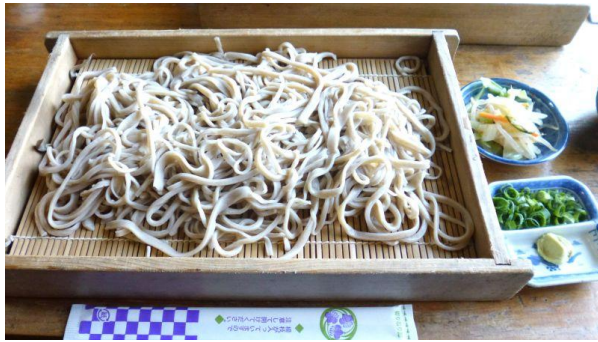
【銀山温泉】

昼食はシロちゃん行きつけのそば屋「紅留満（くるま）」で、この地方の名物“板そば”を食べる。麺は太めで、盛りが良く2〜3人前はあるだろう。さらに天ぷらまで頼んでくれたから凄い量になっている。

それにしてもシロちゃんも美魔女軍団は良く食べる。この人たちの胃袋はいったいどうなっているのだろうか。

シロちゃんと店主が山形弁でサクランボの収穫のことを話している。私には何の話をしているかまでは分かるが、内容まではとても理解できない。

フランス人がスペイン語を聞いておおよそは理解できるというのが、そんなことかと実感する。



【紅留満の板そばと天ぷら】

■サクランボの出荷

再び町に戻り、サクランボの仕分け作業場を見学させてもらう。

農家のオバサン、いや、お姉さまたちが楽しそうに仕分け作業をしている。雰囲気は和気あいあいとしているが、緻密で細かい作業をしている。それは収穫したサクランボを厳格にサイズ分けして、出来栄でランク分けをしている。1個1個丁寧に扱っており、サクランボがとても高価なものとして扱われていることが分かる。



【サクランボの仕分け作業】

そのような光景を見て、今回と同じメンバーで2年前に行った九州旅行を思い出した。

熊本のスーパーマーケットで山形のサクランボの予約販売の看板があった。それを見てシロちゃんは「オラたちの出荷価格よりも遥かに高い、一桁違う」と目を丸くして言っていた。

自分たちが作っているサクランボが九州ではそんな高値になっているとは夢にも思わなかったようだ。彼は興奮を隠せずに、看板の写真を撮って山形の同胞たちに送っていた。自分たちが精魂込めて作ったものが高く売られているのは悪い気はしないだろうが、消費者はこんな高いお金を払って買っていることに相当驚いていた。

恐らくその値段を見てから、サクランボを単なる農産物として扱うのではなくなったのだろう。やはり現場を見ることが重要で、旅がその手助けになっていることに私も嬉しくなってくる。

シロちゃんの知り合いのリンゴ園に行く。リンゴやラ・フランスの小さな青い実が生る木の下でロボットが自動で草を刈っている。それは家庭用ロボット掃除機を二回りくらい大きくしたもので、こんなところでもロボット化が進んでいることに驚いてしまう。

その隣ではリンゴの間引き作業をしている。この作業はさすがにロボットにはできないようで、ここでもお姉さまたちが和気あいあいと仕事をしている。

農協でサクランボの出荷作業を見学する。農協の職員たちは私たちを暖かく迎えてくれる。これもまたシロちゃんやこの地域の人々の人柄だろう。

皆、忙しそうに働いている。それなのに笑いが絶えない。その笑顔と忙しさのバランスがとてもいい感じで、見ている私たちも幸せな気分になってくるから不思議なものだ。

■山形新幹線が止まっている

最終日の朝、山形新幹線が止まっているという情報が入る。どうやら列車故障が原因で、復旧の目途が立っていないらしい。

山形新幹線が止まった場合、仙台駅に行き東北新幹線を使うか、山形空港から飛行機に乗るか、選択肢は少ない。シロちゃんは仙台駅まで車で送っていくと言っているが、いくら図々しい私たちでもさすがにそれは申し訳ない。

仙台駅に行くには山形と仙台を結ぶ JR 仙山線に乗る方法もある。むしろ九州の 2 人は仙山線も初体験なので、私たちは仙山線で仙台駅に行くことにする。

シロちゃんに仙山線で最も近い山寺駅まで送ってもらう。そして別れ際に手土産に箱入りのサクランボをいただく。これも申し訳ないことだが、美魔女軍団と話し合っただけの機会に恩返しをしようと素直にいただくことにする。

実は 2023 年の夏、別のメンバーとここ山寺に来た時もシロちゃんにお世話になった。彼が出迎えてくれて、知り合いの駐車場に案内してもらい、朝採りのモモを差し入れてもらった。その時もメンバー全員が驚き感謝していた。(旅行記「山形探訪の旅 2023」参照)

列車が来るまで結構時間がある。山寺駅の待合室には手頃なテーブルと椅子があって、列車を待つ乗客もいない。そこで反省会と称して、軽く一杯やり始める。

酒のつまみは昨夜の宿の近くの店で美魔女軍団が買った「鯉こくの卵」、これは鯉の身ではなく卵を味噌煮込みした料理で、味は絶品で酒によく合う。

反省会とは言っても、何も反省しないのはいつものことで、やはり今回の旅を振り返ることになる。

今回は食に恵まれた。ソースかつ丼、夜食のラーメン、サクランボの試食、ひなの宿の食べきれない食事、シロちゃんお気に入りの板そば、最後は鯉こくの卵で。〆る。

そしていつものように、次は何処へ行こうかという旅の話で終える。

仙山線の列車に乗り込み、ほろ酔い気分で車窓から山深い新緑の景色を楽しむ。山形新幹線が止まったことにむしろ感謝している3人だった。

■旅の記録

実施は2025年6月15日（日）～6月18日（水）の3泊4日で、その行程を示す。

- ・1日目 朝7時30分に自宅を出て東京駅で待ち合わせ、新幹線で郡山に行き、駅前レンタカーを借り、高湯温泉「玉子湯」で立ち寄り湯、磐梯吾妻スカイラインで裏磐梯へ、「五色沼」を散策、猪苗代駅前の「あまの食堂」でソースかつ丼を食べて、野口英世記念館、天神浜、船津浜湖水浴場見物、「ドーマーイン EXPRESS 郡山」チェックイン
- ・2日目 11時に宿出発、新幹線で13時さくらんぼ東根駅到着、友人の車に乗り河北町へ、さくらんぼ農園、仕分け作業場を見物、べに花温泉「ひなの湯」チェックイン
- ・3日目 9時に宿を出発、友人の車で「銀山温泉」、そば麦処「紅留満（くるま）」で昼食、河北町に戻り、さくらんぼ出荷作業、リンゴの間引き作業見物、宿に戻る
- ・4日目 9時に宿を出て、山形新幹線が運転見合わせのために山寺駅に送ってもらい仙山線で仙台駅に行き、東北新幹線で東京へ出て、帰宅

費用は約67000円になった。詳細は以下に示す。

宿泊費用	39270円（ドーマーイン EXPRESS 郡山 9270円、ひなの湯 2泊 30000円）
JR 費用	18190円（横浜～郡山～さくらんぼ東根～横浜 ジパング倶楽部 3割引 山形新幹線運転見合わせのため実際は仙台経由だが費用発生無し）
レンタカー	2990円（レンタカー6270円、ガソリン1982円、ETC720円を3等分）
昼食	3600円（ソースかつ丼1000円、そば1400円、仙台駅で昼食1200円）
立ち寄り湯	1000円（玉子湯）
その他	約2000円（酒代、つまみ等）